

目的 平面の布をアイロンセットによって立体化する技法の研究のうち、今回はくせとりについてその技術の難易と素材の物性との関係について検討した。

方法 ①官能検査試料は市販のウール地8種。くせとりにより仕上げる曲面は、胸囲と最小胴囲との差26cm、最小胴囲と腰囲との差26~28cmの、胸囲約82cmの文化スタンの後斜側面ウェスト部とした。くせとり実験布の裁断は、指定区域内の体表実長により作図した。すなわち、後中心側の区域端にはたて糸を通すものとし、たて方向3cm間隔に水平方向の体表実長を脇線まで測定し、その実長を布面によこ糸方向にとり、それら各糸を結んで脇線とした。このため脇線は極端なくの字型になる。くせとり難易度実験者は本学被服構成コース3年次の学生32名で、くせとり技法の示範、説明に従って指定された曲面に密着するまでくせとりを行ない、同一検査者によって仕上りの状態を点検し、同じ程度に曲面が構成されたと認められた時にその難易度を順位法で回答させた。

②布地の物性はその構成要素と硬軟度、および変形性能として伸長荷重測定と剪断変形に伴う荷重の計57項目の測定を行なった。

結果 官能検査結果はKendallの一致性係数 W の検定において有意の一致がみられ、分散分析結果から試料間に高度の有意差が認められた。このことから単相関係数を求めて試料の物性とくせとり易さの関係を見ると、厚さ、織糸交差数、カバーファクター、30%バイヤス伸長荷重、剪断臨界角の各項目が高い相関を示した。更に39測定項目の主成分分析の結果では、 α_1 主成分としてバイヤス伸長抵抗特性、 α_2 には織糸特性が抽出された。